

コロナ禍に思う。(2021 年 9 月 13 日)

長崎大学 学生のみなさん

こんにちは！

長崎大学人、河野茂です。

各学部長と交互に配信している「月曜通信」ですが、今月は 2020 年 4 月に設置された情報データ科学部です。

情報データ科学部長、西井龍映先生から皆さんへのメッセージを送ります。

西井龍映先生 紹介ホームページ

https://www.idsci.nagasaki-u.ac.jp/research_ac/facultylist/staff1/

コロナ禍に思う

情報データ科学部長 西井 龍映

コロナ禍が始まった 2020 年初め、全人類への危機を題材にした SF ショートショートを思い出しました。大学生のころに読んだ本ですので題名を忘れていましたが、yahoo 知恵袋にストーリーを投稿し、「スポンサーから一言」(フレデリック ブラウン) という 1951 年の作品だとわかりました。朝鮮戦争が始まったのが 1950 年、小説の舞台は米ソ対立真っ只中の 1954 年という時代背景です。作品は世界中のラジオが「戦え」というスポンサーからの一言だけが放送されたことから始まります。スポンサーとはだれか、目的は何でしょう。

実はスポンサーとは相互に繋がった計算機でした。それらが同時発的に共通の仮想敵を作り出し、敵に対処するため人類が連帯し紛争をなくすというものです。もちろん現在の人類共通の敵とは COVID-19 であり、治療法の発見と開発のため世界中の研究者が取り組んでいます。私は SF のように政治的にも世界が一体となって危機に対処するだろうと期待しましたが、各国のエゴが明らかになったことは残念です。

ラウンは 1951 年に現在のネットワーク社会を的確に予測しました。当時の数値計算を行うだけの正に計算機から、現代のコンピューターの集合体が相互に情報をやり取りするインターネットを想像したことは驚くべき慧眼です（注 1）。ICT の進展により、人と人、人

と物、物と物との通信、動画像やデータの保存が可能となりました。コロナ禍以降オンライン会議・授業が普通のコミュニケーション手段となりました。一方人間的繋がりの構築には、対面が必要不可欠であることも改めて認識させられました。昨年度の新入生がコロナ禍に遭遇したことは誠に不幸でした。時間はかかっても新しい人間関係を構築して欲しいと願っています。なお COVID-19 のワクチンや薬剤の開発に、情報科学やデータ科学が直接的あるいは間接的に貢献していることを指摘したいと思います。

ネット社会や AI は功ばかりではなく、罪の側面も有しています（注 2）。情報化の罪に目を向けた小説・映画等の創作物が多い中で、この作品は例外的といえるでしょう。皆さんにはコロナ禍を奇貨として、ブラウンの夢見た人類の連帯に向けた貢献を期待します。

注 1：ブログ：世界大戦を回避させた「スポンサーから一言」

<https://www.gixo.jp/blog/4301/>

注 2：The role of AI in achieving SDGs

<https://www.nature.com/articles/s41467-019-14108-y.pdf>

SDGs に対する AI の影響を功罪両面から評価しています。